

広島県のキンキヒョウタンボク (*Lonicera ramosissima* Franch. et Sav. ex Maxim. var. *kinkiensis* (Koidz.) Ohwi), スイカズラ科について\*

世羅徹哉<sup>1)</sup>

Notes on *Lonicera ramosissima* Franch. et Sav. ex Maxim. var. *kinkiensis* (Koidz.) Ohwi (Caprifoliaceae) from Hiroshima Prefecture\*

Tetsuya Sera<sup>1)</sup>

Summary

Preliminary research was conducted to clarify the taxonomical features of *Lonicera ramosissima* var. *kinkiensis* from three habitats in Hiroshima Prefecture. As a result, it was suggested that it is appropriate to consider that *L. ramosissima* var. *kinkiensis* from Hiroshima Prefecture is better regarded as *L. ramosissima* var. *ramosissima sensu lato*.

**Keywords:** Hiroshima Prefecture, *Lonicera ramosissima* var. *kinkiensis*, *Lonicera ramosissima* var. *ramosissima sensu lato*, taxonomical features

キンキヒョウタンボク (*Lonicera ramosissima* Franch. et Sav. ex Maxim. var. *kinkiensis* (Koidz.) Ohwi) は、スイカズラ科スイカズラ属の落葉低木で、Koidzumi (1937) が、コウゲイスカグラ (広義) (*L. ramosissima* Fr. et Sav. ex Maxim. var. *ramosissima*) に似るが、苞が線形であること及び葉がやや菱型状卵形～披針形状卵形で先端が鋭形となる点で異なる新種として記載した。その後大井 (1953a, b) がコウゲイスカグラ (広義) の変種とし、現在その扱いが一般的である (北村・村田 1971, 大井 1983, 原・大場 1989, Ohba 1993, Ito et al. 2016, 五百川・奥山 2017)。また、分布域に限られ、個体数が少ないことから環境省が絶滅危惧 I B 類に選定している (環境省 (編) 2015) ほか、各自治体の絶滅危惧種等に選定されている (兵庫県, 大阪府, 三重県, 奈良県, 滋賀県, 香川県, 広島県)。

本変種の分布域は、一般的な図鑑である「日本植物図鑑本編 I (保育社)」や「日本の野生植物 (平

凡社)」では近畿地方と四国北東部とされ、広島県を分布域としていない。一方で、広島県を分布域に加えている文献としては、大井 (1953a, 1978, 1983), 広島大学理学部附属宮島自然植物実験所・比婆科学教育振興会 (編) (1997) (以下「広島県植物誌」とする), 加藤・海老原 (2011) などがある。ところが、広島県産のキンキヒョウタンボクは形態的に典型的なものとは異なっているので再検討が必要であるとする見解が示され (吉野・関 2012), さらに井波 (1990) は、広島県産の資料を描くとともに、本変種をチチブヒョウタンボクなどの近縁種と区別するのは困難であるとしている。

以上のように、広島県のキンキヒョウタンボクについては再検討の余地があることが指摘されているが、具体的な検討は行われていない。これまで、広島県内のキンキヒョウタンボクの自生地は、県北西部 (北広島町) の 1 場所で、生育個体数

\* Contribution from the Hiroshima Botanical Garden No.110

1) 広島市植物公園

Bulletin of the Hiroshima Botanical Garden No.35:1-5, 2021.

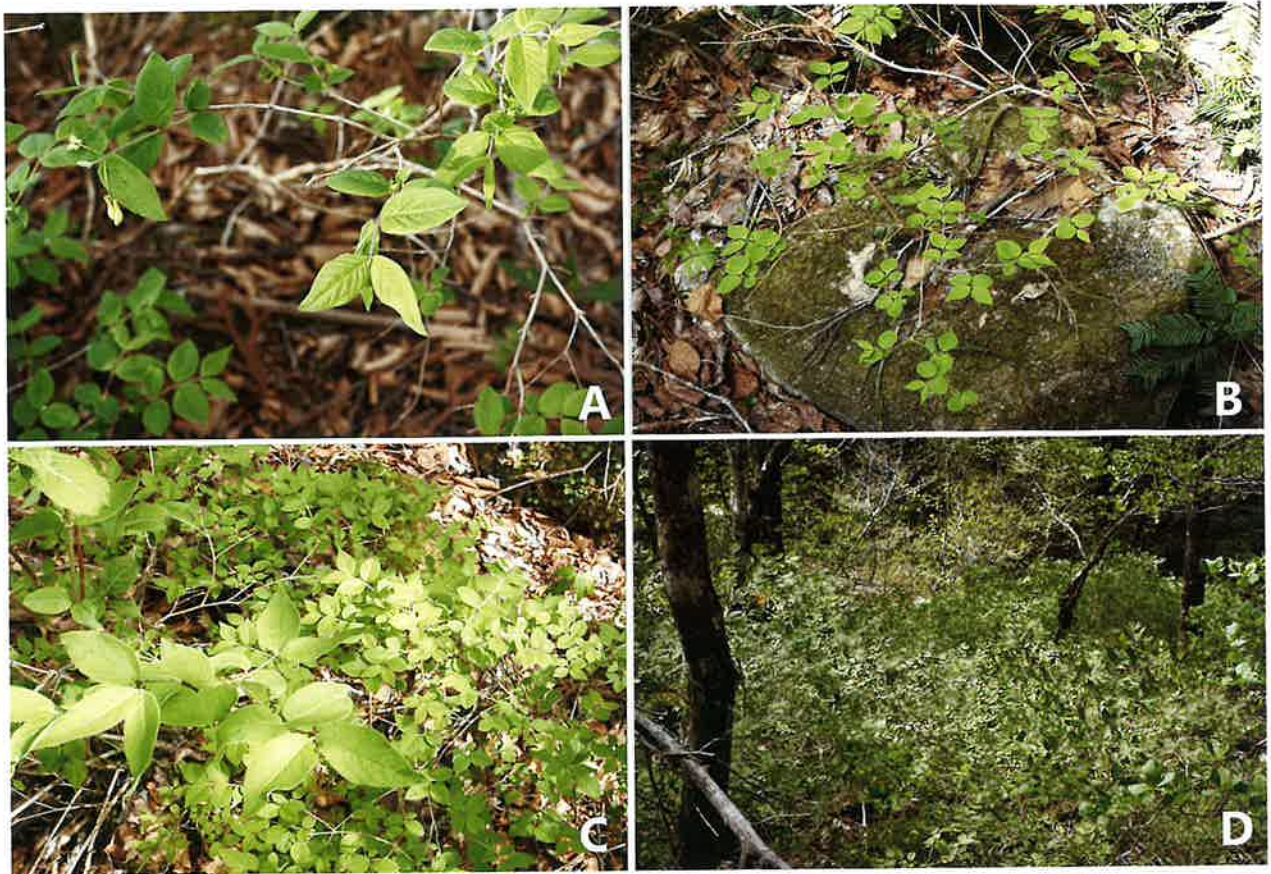


Fig. 1. Photographs of *Lonicera ramosissima* var. *kinkiensis* in different three habitats in Hiroshima Prefecture. A: Kitahiroshima-cho (No. 1), B: Kitahiroshima-cho (No. 2), C and D: Hatsukaichi-city (No. 3), C; growth situation mixed with *L. strophiphora* var. *glabra* (large leaves in the foreground), D; a large population of *L. ramosissima* var. *kinkiensis* estimated to consist of more than 100 individuals.

もわずかとされていた（広島県植物誌，吉野・関2012）。ところが，近年新たに2場所で生育していることが発見され，そのうちの1場所では相当数の個体が群生している状況であることを確認した。そこで，県内のキンキヒョウタンボクを検討するための予備的な調査を行ったのでその結果を報告する。

## 材料および方法

### 1 生育状況の記録

新たに確認した自生地を含め3場所の生育状況の概要を記録した。

### 2 形態調査

広島市植物公園に保管している広島県産の11個体（自生地No.1, 2, 3それぞれの4, 1, 6個体）の腊葉標本を使い，葉の外形および苞の外形と大きさを調べた。葉は，新梢の先端部にある大きな

葉のうち，展葉が終わったものを選び，複写機を使って作製した陰影を用いた。また，当園所蔵のコウグイスカグラ（広義）の腊葉標本から同様に作製した陰影と，京都大学総合博物館の標本データベースに公開されているキンキヒョウタンボクの標本写真から作製した陰影を比較に用いた。苞は，乾燥状態のものを水に1昼夜浸漬して戻したものをスライドグラス上で伸展させ，その外形の陰影を作製して比較した。その際，2個ある苞のうち，大きい方を調べた。

## 結果および考察

### 1 生育状況

これまで唯一の自生地とされていた場所（No.1）は，北広島町にある巨岩でできた岩峰状の山頂部で，海拔高度は1190 m。巨岩上や岩棚に点在して生育していた（Fig.1A）。周辺はブナ林だが，生

育場所に高木はなく、南西方向に開けていた。自生個体は10~20本程度と思われる。集団の中にダイセンヒョウタンボク (*L. strophiphora* Franch. var. *glabra* Nakai) が少数混生していた。

新たに確認した2自生地の中の1場所 (No.2) は、上記自生地と渓谷を挟んだ東側の山塊の西斜面で、海拔高度は900 m前後、落葉広葉樹林中の大きな岩礫が堆積している斜面で、わずかに水流のある谷沿いの約50 mにわたって10本程度が生育していた (Fig.1B)。生育密度は上記の場所よりも低く、花をつけた個体もより少なかった。

別の新しい自生地 (No.3) は廿日市市にあり、山口県、島根県との県境に近く、海拔高度は1220 m。ブナやカエデ類がまばらに生える落葉樹林中で、No.1やNo.2に比べて広範囲に生育していた。大きな岩礫が堆積した急斜面では生育密度はあまり高くなく、カンスゲなどの少数の草本とともに生えていた。一方で、やや緩斜面で浅く土壌が堆積した明るい場所では、ダイセンヒョウタンボクとの混生や (Fig.1C)、100個体以上と推定される群生も見られた (Fig.1D)。

## 2 外部形態

今回比較した葉を Fig.2 に示した。調べた11個体の葉の大きさ (葉柄部含む) は、長さが5.2 cm~2.7 cm、幅が2.5 cm~1.4 cmの範囲であった。自生地別では、自生地No.1の4個体は長さが5.2 cm~3.4 cm、幅が2.5 cm~1.8 cm、No.3の6個体は長さが4.2 cm~2.7 cm、幅が2.3 cm~1.4 cmで、No.1のほうが大きい傾向にあった。No.2の1個体は、長さ2.7 cm、幅1.9 cmであった。葉身の外形は、楕円形~卵形または長楕円形で、基部は円形または広い楔型、先端部は鋭形~やや鋭尖形であった。自生地No.1の個体は、No.3の個体に比べて先端部がより鋭尖形に近くなる傾向があるように思われた。今回比較したNo.2の個体の葉は、葉身が楕円形で先端は最も鈍形に近かったが、No.2に生育する個体の中にはその他の自生地に見られるような外形の葉をつける個体も観察されている (Fig.1B)。広島県産の個体の葉は、大きさや外形に変異があるものの、典型的なキンキヒョウタンボク (Fig.2l) と広義のコウグイスカグラ (Fig.2m) の中間的な形態であった。

苞を比較した図を Fig.3 に示した。11個体の苞の大きさは、長さが3.5 mm~6.5 mm、幅は0.3 mm~1.8 mmの範囲であった。子房の長さは1.7 mm

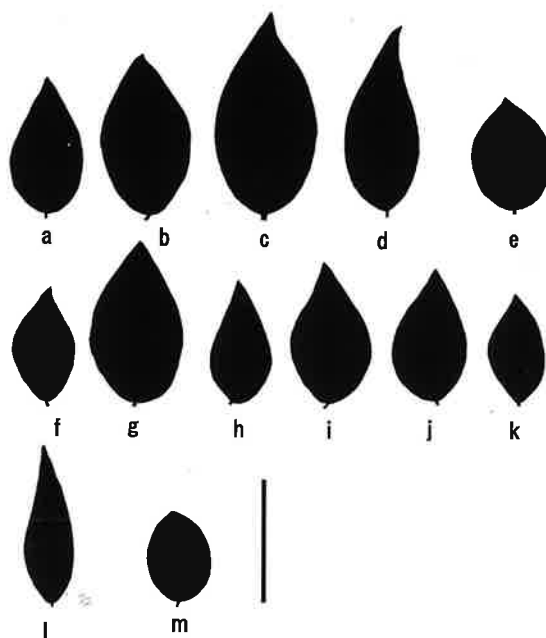


Fig. 2. Shadows of leaves of *L. ramosissima* var. *kinkiensis* of 11 individuals (a-k) from three habitats in Hiroshima Prefecture investigated. a-d: No. 1, e: No. 2, f-k: No.3, l and m are for reference, l: *L. ramosissima* var. *kinkiensis* from Mt. Rokko in the collection of Kyoto University, m: *L. ramosissima* var. *ramosissima* sensu lato from Kochi Prefecture. Bar indicates 3.0 cm.

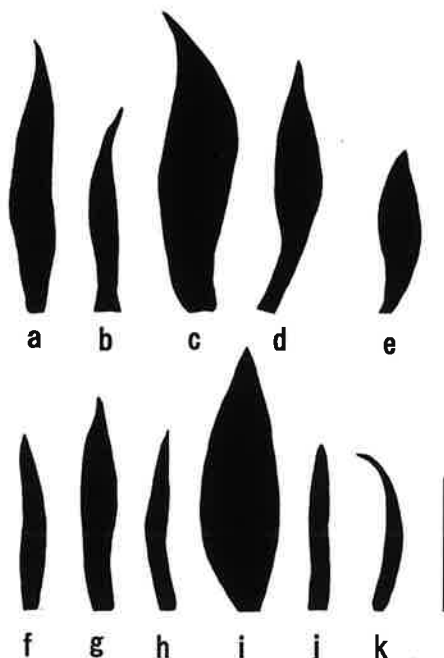


Fig. 3. Shadows of bracts of *L. ramosissima* var. *kinkiensis* of 11 individuals from three habitats in Hiroshima Prefecture. a to k are the same individuals as a to k in Fig. 2, respectively. Bar indicates 3.0 mm.

～3.0 mm の範囲であって、すべての苞は、子房より明らかに大きかった。産地別では、No.1 の4個体が長さ 4.5 mm～6.5 mm、幅が 0.7 mm～1.8 mm の範囲であったのに比べ No.3 の6個体は長さが 3.5 mm～5.5 mm、幅が 0.3 mm～1.3 mm の範囲で比較的的小型であった。No.2 の1個体では、長さが 3.5 mm、幅が 0.8 mm であった。苞の外形は、線形、広線形～線状披針形または長楕円形などで、同一産地内でも個体によって様々な形を示したが、No.3 の個体は No.1 と比べ細いものが多かった。

Koidzumi (1937) は、キンキヒョウタンボクをコウゲイスカグラと区別する特徴として、①苞が糸状 (filiformibus)、②葉はやや菱形状卵形～披針形状卵形、③葉の先端が鋭形という3形質を挙げている。これらの特徴によれば、広島県産の個体は、苞の形が異なる場合もあるがおおよそキンキヒョウタンボクの範疇に入るのではないかとと思われる。しかしその後、大井 (1953a) は、「①葉は通常幅が狭く、②先端が細く先が鋭尖形になり、③苞は細く、④ほぼ子房と同長程度の大きさ」と記し、原・大場 (1989) は、「①葉は卵状披針形から披針形で、②先端は鋭尖、③苞は線形で、④長さは 1.5 mm～2.5 mm」とした。現在受け入れられているこれらの特徴によれば、今回調査した広島県産の標本は、①葉身の外形には変異があり、卵状披針形に近いものもあるが、披針形のものはなく、広義のコウゲイスカグラ (Fig.2m) に近い。②葉先の形状は鋭形で、鋭尖形に近いものもある (Fig. 2d)。③苞の形は線形～長楕円形まで様々で、集団としてはキンキヒョウタンボクの特徴とは異なる。④苞の大きさは、長さが 3.5 mm～6.5 mm の範囲にあり、子房の長さ (1.7 mm～3.0 mm) に比べると明らかに大きく、キンキヒョウタンボクの特徴とは異なる。以上のように、予備的な調査の結果では、広島県産のキンキヒョウタンボクは、広義のコウゲイスカグラ (*L. ramosissima* Franch. et Sav. ex Maxim. var. *ramosissima sensu lato*)、原・大場 (1989) らに従えばチチブヒョウタンボク (*L. ramosissima* Franch. et Sav. ex Maxim. var. *ramosissima* f. *glabrata* (Nakai) H.Hara) とみなすのが妥当であることが示唆された。

広島県にキンキヒョウタンボクが分布するとした最初の文献は、大井 (1953a) と思われるが、その経緯は不明である。S-Net サイト上でキンキヒョウタンボクの標本情報を検索した結果、国立科学

博物館植物標本庫に、広島県で採集された標本が収蔵されていることが分かった (国立科学博物館 (植物) TNS58096)。それによると、標本は、田代善太郎氏が 1937 年 9 月 15 日に現在の広島県廿日市市吉和で採集したもので、採集地は今回調査した産地 No.3 と同じ地域であった。また、写真による葉の外形は卵形で先端部は鋭尖形状に尖り、今回調査した産地 No.3 で見られるものと同様であった (Fig. 2i)。写真では苞の形は判別できないが、今回の調査で No.3 では、線形の苞を持つ個体も観察されている (Fig. 3f, h, j)。以上のことから、この標本は、Koidzumi (1937) の特徴によるキンキヒョウタンボクとされ、広島県にキンキヒョウタンボクが分布するという根拠になったと推察される。

本変種は、三重県、滋賀県、兵庫県などで新しい自生地が発見されているが、基準産地とされる六甲山では、その自生が確認されなくなっている (小林ほか 1998)。また、香川県でも環境変化のため近年自生が確認されていない (香川県レッドデータブック 2004, 久米 修氏私信)。今後調査を進めて広島県産の植物とキンキヒョウタンボクの関係を明らかにすることは、本変種の絶滅危険度を評価するうえでも必要と考えられる。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、広島大学大学院統合生命科学研究科の山口富美夫教授に貴重な助言をいただきました。新たな自生地の調査では、高杉茂雄氏の協力を得ました。国立科学博物館植物研究部の遊川知久博士には、標本写真の閲覧等に便宜を図っていただきました。久米 修氏からは、香川県内の自生地の現状について情報をいただきました。記して感謝の意を表します。

## 摘 要

広島県産のキンキヒョウタンボクの分類学的特徴を明らかにするため、予備的な調査を行った。その結果、広島県に産するキンキヒョウタンボクと呼ばれている植物は、広義のコウゲイスカグラ、厳密にはチチブヒョウタンボクとされる可能性が高いことが示唆された。



## 引用文献

- 五百川裕・奥山雄大 2017. スイカズラ科. 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司(編) 改訂新版 日本の野生植物 5. pp. 413-428. 平凡社, 東京.
- 原寛・大場秀章 1989. 佐竹義輔・原寛・亘理俊次・冨成忠夫(編) 日本の野生植物 木本 II. pp. 224-247. 平凡社, 東京.
- 広島大学理学部附属宮島自然植物実験所・比婆科学教育振興会(編) 1997. 広島県植物誌. 832 pp. 中国新聞社, 広島.
- 兵庫県レッドデータブック 2020. [https://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/download\\_file/view/14712/20725](https://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/download_file/view/14712/20725) (2020年12月3日確認)
- 井波一雄 1990. 広島県植物図選 V. 241 pp. 博新館, 広島.
- Ito, M., Nagamasu, H., Fujii, S., Katsuyama, T., Yonekura, K., Ebihara, A., Yahara, T. 2016. GreenList ver. 1.01, (<http://www.rdplants.org/gl/>)
- 香川県レッドデータブック 2004. <https://www.pref.kagawa.lg.jp/kankyo/shizen/rdb/data/rdb1122.htm>
- 加藤雅啓・海老原淳(編) 2011. 日本の固有植物. 505 pp. 東海大学出版会, 神奈川.
- 環境省(編) 2015. レッドデータブック 2014 —日本の絶滅のおそれのある野生生物— 8 植物 I (維管束植物). 708 pp+16 pls. ぎょうせい, 東京.
- 北村四郎, 村田源 1971. 原色日本植物図鑑 木本編 I. 453 pp. 保育社, 大阪.
- 小林禱樹・黒崎史平・三宅慎也 1998. 六甲山地の植物誌. 301 pp + 56 pls. (財) 神戸市公園緑化協会, 兵庫.
- Koidzumi, G. 1937. Contributiones ad Cognitionem Florae Asiae orientalis (continued from vol. V. pp. 129). Acta Phytotaxonomica et Geobotanica, 6: 210-223.
- 国立科学博物館(植物). S-Net サイト (<http://science-net.kahaku.go.jp/>) (2019年10月29日確認)
- 京都大学総合博物館. [http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/collection/PlePlant/index\\_PlePlant.htm](http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/collection/PlePlant/index_PlePlant.htm) (2020年11月28日確認)
- 三重県レッドデータブック 2015. <http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000401559.pdf> (20201029)
- 奈良県レッドデータブック改訂版 2016. <http://www.pref.nara.jp/secure/178458/redlist3.pdf>
- Ohba, H. 1993. Caprifoliaceae. Iwatsuki, K., Yamazaki, T., Boufford, D. E. and Ohba, H. (eds.) Flora of Japan IIIa. pp. 420-448. Kodansha, Tokyo.
- 大井次三郎 1953a. 日本植物誌. 1383 pp. 至文堂, 東京.
- 大井次三郎 1953b. “日本植物誌”中に掲出せる植物の新学名及新組合せ. 国立科学博物館研究報告 33号: 66-90.
- 大井次三郎 1978. 改訂増補新版 日本植物誌 顕花篇. 1584 pp.+56 pls. 至文堂, 東京.
- 大井次三郎 1983. 新日本植物誌顕花篇(北川政夫改訂). 1716 pp. +30 pls. 至文堂, 東京.
- 大阪府レッドリスト 2014. <http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/21490/00148206/11.ikansokushokubutsu.pdf> (2020年12月3日確認)
- レッドデータブックひろしま改訂検討委員会(編) 2012. 広島県の絶滅のおそれのある野生生物(第3版)—レッドデータブックひろしま 2011—. 633 pp. + 12 pls. 広島県, 広島.
- 滋賀県レッドリスト 2015年版. <https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/5161068.xlsx>
- 吉野由紀夫・関太郎 2012. キンキヒョウタンボク. レッドデータブックひろしま改訂検討委員会(編). 広島県の絶滅のおそれのある野生生物(第3版)—レッドデータブックひろしま 2011—. pp. 363. 広島県, 広島.